

**P1-59**

エンゼルケアの経験が看護師の看取り看護にもたらす変化

伊藤愛、中山麻由美  
JCHO 船橋中央病院

【目的】エンゼルケアの経験が看護師の看取り看護にもたらす変化を明らかにする。  
【方法】血液内科病棟に勤務する看護師6名に対して、インタビューガイドをもとに面接を行い、得られたデータを質的帰納的方法で分析してコード化し、さらにサブカテゴリ、カテゴリに分類した。  
【結果】分析の結果、エンゼルケアの経験が看護師の看取り看護に与えた変化に関して5つのカテゴリに分類された。『看護としてのエンゼルケアの認識』『最初のエンゼルケア経験の影響』『家族の喪失感の緩和』『生と死の捉え方の変化』『患者本位の看取り看護の志向』の5つのカテゴリに分類され、看護師はエンゼルケア経験の後、エンゼルケアの看護としての可能性を認識するに至り、その認識の変化により看護師の看取り看護への態度や看護の質の変化が促進されたことを示していた。  
【考察】エンゼルケア経験は看護師に内省を促すとともに、看護師の死生観に影響を与えるものであった。また、看護師はエンゼルケアが持つ家族のグリーフケアとしての側面を認識していた。これらの経験の積み重ねが看護師の看取り看護の実践や態度に変化を起し、それに気づいた看護師は繰り返しエンゼルケアに関わりを持っていた。  
【結論】本研究において、エンゼルケア経験が看護師の看取り看護に対する認識を変化させ、看護師が提供するケアの質を変えていく可能性があることが明らかとなった。したがってエンゼルケアに関わる機会を看護師が持てるようにすることによって、看護師としての成長の機会が与えられると考える。本研究は1施設における6名の看護師のみを対象としており、今後データの蓄積が必要となる。また今後は、教育プログラムの早い段階にエンゼルケアを組み込み、その経験がどのように看護師の認識やケアに影響を与えるかについて継続して調査していく必要がある。

**P1-60**

チェックリストを用いたHCU教育計画の検討  
～プリセプティ、プリセプター、指導者それぞれの立場から～

大谷麻美、伊藤真以、飯田梓、森部  
JCHO 四日市羽津医療センター 看護部

1. 背景：平成27年3月A病院では地域包括ケア病棟を開設のため病棟編成がおこなわれ、同時に循環器・内科の重症患者、全身麻酔後の管理、救急患者の受け入れなどを目的としハイケアユニット（以後HCU）も新設された。開設後すぐに高度な医療の提供に伴い当初はラダー3以上の看護師で構成されたが、配置転換により経験の浅いラダー2～3の看護師が多くなった。配置転換に伴い必要な知識や技術の習得状況を可視化し学習内容の把握をする必要があると考え、平成28年度HCU教育プログラムの1つとしてチェックリストを作成した。内容は業務に必要な技術チェック評価、技術チェックをもとに1・3・6ヵ月で自己目標を立てる目標シートと2種類を作成し、プリセプティ、プリセプター、指導者で共有した。しかし、プリセプターも後輩に教育するには十分な知識と技術を習得してはいない。チェックリストを使用し指導することで、自己の知識不足の再確認を行い、再度学習することでプリセプターの成長も促す必要があった。HCUが設立されて4年が経過した。プリセプティ・プリセプターを共に経験したスタッフが増え、様々な立場からの意見をもらえる環境にある。今回、教育計画について評価を行ない、課題を見出すための検討をおこなう必要があると考え、プリセプティ、プリセプター、指導者それぞれの立場からの意見をもとに検討を行う。  
2. 目的：チェックリストの検討をおこなうことで、教育計画について課題を見出す  
3. 方法 対象：HCU勤務経験のある看護師でプリセプター、プリセプティ経験者、教育担当者 方法：チェックリストや教育計画について自由記載によるアンケート+面接調査KJ法にて分析  
4. 期待される成果教育方法についての現状把握を行い、教育計画についての課題を見出し、教育環境を整えることで今後の教育に役立てることができる。

**P1-61**

急性期病院における院内デイケアの取り組み

中野加代子、塩浦亜紀子  
JCHO 星ヶ丘医療センター

【目的】当院では、平成28年2月から認知症やせん妄を伴う患者に対して、行動・心理症状の緩和を図ることを目的に院内デイケアを開設した。その実践の効果について報告する。  
【方法】対象：入院中の65歳以上の認知機能障害、せん妄のある患者で、車いすに座れる患者、かつ急変リスクの低い患者116名  
開催方法：週2回（火・金）開催。1回につき1時間で、病棟の多目的室を使用。看護師1名、介護福祉士1名、セラピストで1回6～12名の患者を担当している。  
調査方法：2018年4月～2019年3月末までの院内デイケア記録と、院内デイケアに参加した部署の認知症ケアリンクナース13名への聞き取り調査を単純集計した。  
【結果】年間延べ648名の利用があり、新規利用者の60%が認知症高齢者の日常生活評価表の生活全般に援助が必要な患者で、75歳以上が90%を占めていた。院内デイケアの利用目的としては、日中の離床・活動性を上げ、生活リズムを整えることが全体の半数を占めていた。院内デイケア利用後に、興奮や落ちつかないといった行動症状があった患者が開催を楽しみにするようになったことや、心理症状として不眠があり、昼夜逆転していた患者が昼夜のリズム補整のきっかけにできたといった行動・心理症状の緩和につながっていた。また院内デイケア中に見られた変化として、利用者同士がコミュニケーションできるようになり、なじみの関係形成ができ、風船バレーなどのゲーム中に助け合う姿が見られるようになった。院内デイケアが患者同士のふれ合いの機会として社会性の維持にもつながっていた。  
【まとめ】院内デイケアがきっかけとなり、昼夜のリズム補整の働きかけにつながり、行動・心理症状の緩和に効果があった。今後は、院内デイケアでの関わりを病棟でどのように継続させていくかが課題である。また行動・心理症状の緩和により身体拘束の減少をめざしていきたい。

**P1-62**

身体拘束最小限に向けた認知症患者への看護  
～パーソン・センタード・ケアのVIPSを意識した関わりを通して～

池上優衣、高澤美鈴、山代裕子  
JCHO 湯河原病院 看護部

【はじめに】アルツハイマー型認知症（以下AD）のA氏に対して入院時よりパーソン・センタード・ケアの4つの要素（以下VIPS）の視点で患者の尊厳を重視しながら看護ケアを行った。その結果、身体拘束を減らすことに繋がった1事例を振り返る。  
【目的】A氏に対しVIPSの視点で看護ケアを行うことにより身体拘束を減らすことに繋がることがわかる。  
【研究方法】圧迫骨折で入院したADのある男性A氏の看護記録、診療録からVIPSを用い看護ケアの振り返りを行う。  
【倫理的配慮】所属施設の倫理委員会の承認を得て実施した。  
【結果】V 人々の価値を認める：状況把握ができるよう、入院していることや骨折している旨を記載した用紙を床頭台に貼った。I 個人の独自性を尊重する：3日間クリップ式離床センサーを使用し行動観察をした。その結果、起き上がりの原因は排泄欲求のためと分かった。P その人の視点に立つ：体動時に痛みが出現するため、パジャマから浴衣へ変更し体動を少なくした。S 相互に支え合う：入院時より入院生活、治療方針、認知症状悪化防止について家族に説明し協力を依頼した。  
【考察】入院している理由を繰り返し説明する以外に、用紙を貼って視覚的に訴えることはA氏が状況把握をするために効果的であったと考える。また、A氏の行動観察することで起き上がる理由がわかり、クリップ式離床センサーの解除に繋がった。体動時の痛みに対して病衣の工夫をしたことは、疼痛を最小限にすることに繋がったと考える。患者にとって家族は安心できる存在である。入院時から家族の協力を得られたことで、自宅に近い環境を作ることができ患者の安心に繋がった。  
【結論】VIPSの視点で看護ケアを行うことで、身体拘束を減らすことに繋がった。

**P1-63****カテーテル検査治療を受ける患者の不安の実態調査**

梶原夕貴、白濱美咲、江野真奈美  
JCHO星ヶ丘医療センター 看護部

【はじめに】循環器内科では冠動脈造影検査<以下CAG>、経皮的冠動脈形成術<以下PCI>、カテーテルアブレーション治療<以下ABL>などのカテーテル検査や治療がある。患者からは、初めての治療で具体的なイメージがつかない、治療後にベッド上で安静が守ることができるか心配など不安の表出があった。そこで不安の程度や要因について調査した。

【目的】ABL終了後に迷走神経反射を起こす患者が多く不安や緊張は迷走神経反射などの合併症を誘発することから、カテーテル検査、治療前後の不安の実態調査を行い看護介入につなげていくことを目的とした。

【調査】<研究対象>CAG、PCI、ABLを初めて受ける予定入院患者  
<対象件数>30名 CAG 10名、PCI 10名、ABL 10名

<データ収集期間>平成30年8月1日～平成31年1月31日

<データ収集方法>記述式、アンケートによる調査

<分析方法>STAIの不安尺度を用いて患者のカテーテル検査治療前の心理状況を分析、カテーテル検査治療後の具体的な状況における心理状況に関するアンケートを用いて分析

【結果】カテーテル前ともSTAIの不安尺度の状態不安41点以上の割合はABLが50%、CAGが50%、PCIが30%であった。カテーテル実施後のアンケートでは、ABLの場合不安はないものが多かったが、STAIの特性不安で高得点の場合に限りカテーテル挿入時の疼痛、排泄、環境に関する不安があった。CAGは特性不安に関係なくABL同様の不安があった。PCIはほとんどなかった。

【考察】PCIのみ不安が減少しているのはPCI治療の前にCAGを経験し、カテーテル治療のイメージがついているためと考えられる。CAGに比べ、ABL実施後に不安が低かったのは、術中に鎮静していることが要因となっていると考える。

【結論】PCIの結果から検査や治療内容をイメージ化することで不安を軽減することができると思う。そのためABL前に具体的にイメージできるような説明方法を検討していく。